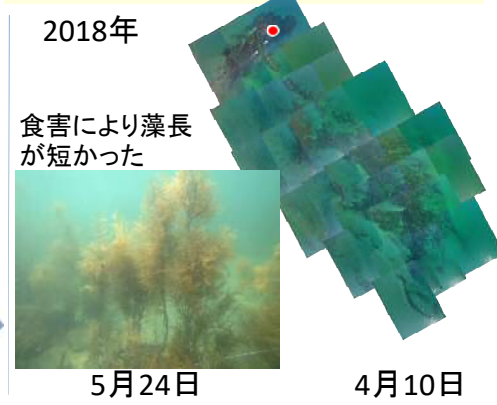


指宿市岩本でのインターバルカメラによる食害魚解析

漁場環境部 研究専門員 猪狩 忠光

【目的】

当センター(指宿市岩本)沿岸には、毎年、ヤツマタモク及びマメタワラ混生の約10ヘクタールのガラモ場が形成されるが、近年、食害に遭い、藻長が短かったり、面積が小さくなったりする現象が見られることから、藻体が短い時期からインターバルカメラを設置し、連続撮影することにより、原因の植食性魚類を特定する。



【方法】

カメラ(KING JIM社製レコロIR7, apeman社製H45, enlleo社製トレイルカメラのいずれか)は、1~3分間隔で撮影する設定で防水ケースに収容後、水深2~3mの海底に固定し、約2週間毎に交換した(実際は電池切れ等で1~26日の撮影となった。)。カメラ回収後、撮影された画像毎に魚の有無、大まかな種類を確認した。なお、今回は魚の種類が判別できる明るさの画像を対象とした。撮影は、2018年11月9日から開始し、2019年7月16日までの画像を解析した。

【結果】

確認された植食性魚類は、イスズミ、アイゴ、クロダイ、メジナ及びタカノハダイであった。出現率(=植食性魚類が見られた画像数/全撮影枚数)は、0.07%(3月)~9.78%(11月)であった。最も多かった種は、クロダイ(1.22%)で、アイゴ(0.08%), メジナ(0.07%), タカノハダイ(0.02%), イスズミ(0.01%)と続いた。**大きな食害はなく広大な藻場は形成された。**

